

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	俳句 : 文苑
Author(s)	渭南; 江村; 白泉; 青花; 水郷; 黙牛; 汀韻; 滴人; 不割; 紅黄; 春草; 南若; 岸三
Citation	龍南會雜誌, 129: 54-57
Issue date	1909-02-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6207">http://hdl.handle.net/2298/6207</a>
Right	

俳句

紫溟吟社、新年句會。

手毬

つく我れに火燧の母の手毬唄  
鈴下駄も犬も追ひ行く手毬哉  
振袖の衣紋目出度き手毬か  
色町に飾る手毬の二階かな  
居留地の日本娘や手毬つく

水祝

云ひ難き怨も搗てし水祝  
薬賣る老舗の門や水祝  
婦とありし青樓の子や水祝  
月代の寒げに青し水祝

左義長

對岸の左義長曇りや丘遠し  
空濛の底に左義長の人敷哉  
寺町を吹く大風に左義長哉

渭南 江村 全 白泉 青花  
汀韻 青花 水郷 渭南

黙牛 水郷 全

左義長する小石川原や雪模様  
野に遠く一帆見わた左義長哉  
どんごせし河原の道に暮雪哉

万歳

万歳や袖する雪の五條橋  
万歳を宿に呼び込む避寒哉  
万歳に小錢換わけり渡り守  
万歳や雪に日當る車寄せ  
万歳の野道戻るや初夜の月  
袖笠の万歳通る雪の町  
万歳に礮と逢ふて笑ひけり  
万歳の烏帽子に初日瞳々と

火桶

火桶かこむ親子や雪のかゝり舟  
句にうとく火桶の炭をあせり鼻  
火桶だいて鼠に物を云ふ夜哉  
宿直や火桶を抱いて日誌書く  
試合見る師範に小さき火桶哉

江村 渭南 全 黙牛 白泉 水郷 全 渭南 汀韻 黙牛 全 汀韻 江村 全 渭南

青花 渭南

毀譽の愚を塞き火桶に嘲ひけり

水郷

水 涕

水涕や筆耕の孜孜黙々と

水郷

水涕に價争ふ油かか

全

水涕や老後を長き賃仕事

江村

水ばなをすゝつて村治村議哉

全

水涕の落ちて白衣を汚しけり

青花

水涕を拭ふ木賃の枕かか

渭南

紫溟吟社小集

枯芦や鳥の日和に綱を練る

滴人

熊棲むと風土記に殘る林かな

全

顔見世や美相の奴媿庄司

全

顔見世やゆく灯木戸の灯檜の灯

不割

棧橋の一枚板や芦枯るゝ

全

雪崩にも熊の遠吠聞けり

白泉

蠅打や遠き汀に芦枯るゝ

全

洲に拾ふ沙木を焚くや芦かるゝ

紅黄

木の皮の煎じ薬や寒の雨

全

寒の雨屋根裏の煤流れけり

江村

顔見世や世は太平の二百年

春草

鹽田のほとりの芦も枯れにけり

南若

枯芦や去來けはしき朝の雲

黙牛

熊突いて戻るアイヌや野の夕日

全

消に殘る灯や顔見世の衣寒し

青花

見世物の兒熊病みけり雨十日

全

魯と鈍と乾鮭に是非を論じけり

水郷

水脈竹に魚も集はず芦枯るゝ

全

熊突の歸らぬも共に祭りけり

岸三

枯芦に鳴網曳くや堀の口

全

寒の雨蔭干す炭に油ひく

全

雜 吟

江

村

遣羽子や片手やさくき袖たぐり

遣羽子の裾ととかやる緋裏かな

敗けて来る次の間暗し歌がるた

袖に包む手毬重たき禿かな

常盤津は昔師匠や松の内

堀り出しの一幅掛けて冬籠

茶の花や家裏寒き山の烟

草屋根の紙窓白し冬木立

能了へて月に成る殿や梅の影

涯の梅散るや筏に簀の人

市に踏む鯛の鱗や春寒し

春の雪湯化粧の妓が高木履

黙

魚賣の日影追ひ行く枯野哉

鳴飛ぶや検疫を待つ蒸氣船

山番の一番風呂や霞降る

上る道曲らんとして枇杷の花

茶の花の垣に煙の上りけり

青

二挺櫓に潮垣を乗り切る初日哉

牛

關東の大火や初日火の如く

藪に湧く金錆水や寒雀

急霰に白馬いばゆる廐かな

悪筆の書に親しむや冬籠

痠腹に濕布を巻くや冬籠

屠牛場の雪にとじみし血汐哉

埋火の灰に字を書く采女哉

水

海越すに足らぬ路銀や鳴く千鳥

楫夫呼べば浪に訝や小夜千鳥

風に鳴る魚見櫓や島千鳥

島は雪の隅晴れ月や鳴千鳥

風を來る馬商人や島千鳥

島渡し瀬戸漕ぎ暮れて千鳥哉

白ひけば濤聲近し小夜千鳥

砂川の杭の浅さや飛ぶ千鳥

夜氣淡き月の江尻や鳴千鳥

忌鬚の結び心や小夜千鳥

郷

滴 人

連判に我れ訪はれけり冬籠

太平の勤儉訓や今朝の春

冬籠古今印譜を深りけり

伊勢は低く源氏枕に小春縁

爐開いて道話閑話に日を消す

鶏を追ふ犬に礫す枯野哉

爐開きや片膝立つる坐り癖

密柑黄に黄ばむ垣越し枯野なる

寒竹を火箸に切りて爐を開く

國分寺の礎残る枯野哉

よべ焼きし梅下の灰や爐を開く

筑波下ろす風に枯れたる冬野哉

昔し男艶書をつぎし紙衣哉

早く閉つ枯野の茶屋に灯乞はむ

勘當に母の情けの紙衣かを

寒稽古四句

懷に小判を握る紙衣かな

劔法の眼冴わけり寒二句

水涕の讀み讀み泣くや悔み狀

道具亂雜にいて破損せり

水涕の人まめまめし後の事

小手とれば小手に穴ある寒さ哉

河豚を割く厨下の月や霜二更

今年は三部生大に振ふ

辻斬りの武士も交れり河豚汁

斯人や此意氣や病魔冬ざれむ

寒稽古を龍頭蛇尾に終る人に、

蛤とあらぬ雀を惜しみけり

渭

南

等身の佛ささむや冬籠